

土の中まで変えられない

急激な経済発展が貧富の格差と深刻な社会のひずみを生んでいる現代中国。フィールドワークでは、そうした劇的な変化のなかに生きる人びとに出会う一方で、また異なった中国社会の側面も見えてくる。



人びとでにぎわう広州の街並み

「中国が急激なスピードで発展している」ということは、ここで改めて繰り返すまでもなく、連日ニュースや新聞などでも取り上げられ、すでに多くの人の知るところであろう。また最近では、いちじるしい経済発展のひずみとして生じた格差が深刻な社会問題となっていることを見聞きする機会も少なくないように思う。いずれにしても、中国は劇的な変化のただ中にあるというのが、さまざまな報道や、あるいはそれをもとに形づくられる、われわれの現代中国観の根底をなしているのは間違いないであろう。

たしかにフィールドにおいても、そうした変化を実感させられることが多い。二〇〇一年から調査をおこなっている広東省の広州市は、すでに一九八〇年代からめざましい発展を遂げてきた沿岸部の大都市であるが、さらにここ数年では、近郊の農村部においても地下鉄や高層マンション

ションが建設されたり、あるいは人びとの収入が倍近くに上昇したりと、まさに変化はとどまることがない。また、そうした豊かさに引きつけられて内陸部からやってきた出稼ぎ移民たちは、都市中心部だけでなく、農村部の村々までに至り、その数が村の定住人口を上回るようになってきているケースも珍しくはない。こうした状況に身を置いていると、たしかに「変化」という言葉が、現代中国の、少なくともその顕著な特質を的確に表現しているように感じられる。

変わりゆく中国のなかの変わらない日常

しかし、個々の人びとの生活レベルに目を向けてみると、それらとはまた異なった現代中国の側面が見えてくる。例えば、いま農村部でもスーパーマーケットが急速に増えつつあるが、私がいつもフィールドでお世話になっている人びとは、毎日のよ

うに市場へ出向き、つい先ほどまで生きていた動物の肉や魚、あるいは早朝に運び込まれてきたばかりの野菜などを買い求めている。日々の食卓には、洋食などはおろか、辛味をきかせたものや揚げたものなど、北部や西部ではポピュラーな料理が並ぶことさえもまずなく、人びとの多くは来る日も来る日も、慣れ親しんだ、あつさりとした味付けの広東料理を食べている。これは高度経済成長期に食生活の欧米化が一気に進んだ日本のケースとは大きく異なっているように。

フィールドでの経験と一般化のはざままで

こうした現地の日常レベルの実情は、短期間の滞在や通常の報道からつかみ取ることはなかなか困難で、フィールドに長期間住み込み、人びとと信頼関係を築きながらじっくりと進めてゆく人類学的な調査手法なければこそすくい上げることができる

ものだろう。

しかし他方で、そうしてフィールドに密着して集めた詳細で具体的な民族誌データには、ともすれば、その村のその人たちの個別的な事例に過ぎないのではないか、という問いかけが常につきまとう。人類学者どうしの場ではさすがにそういうことは少ないが、他分野の研究者の前で発表すると、必ずと言っていいほど、「調査地の詳しい事情は分かりませんが、それはどれくらい一般化して言うことができますか？」とたずねられる。たとえ自分はいくらフィールドワークで知り得た調査地の事例に立脚して話をしているつもりでも、好むと好まざるとにかかわらずそれは、「中国ではこうだ」というようなより普遍化された一般性を伴ってしまつてしまつて避けられない。

また、地域に密着した個別的な事例調査が人類学の大きな強みであるのは間違いないが、それをあまりにも極限まで押し進めてしまつと、例えばかつての親族研究のような通人類学的な理論的基盤に事欠く今日では、地域を越えた議論がしづらくなつてしまつという問題もある。畢竟、多様かつ個別的なものでしかないひとつひとつの事例からできる限りの一般性を導き出すにはどうすればよいのか。そうした大きな語りのもとではひとつくりに回収さ

かわぐち ゆきひろ
川口 幸大
民博 機関研究員

専門は文化人類学。中国、おもに広東省珠江デルタ地域における「伝統」の形成とその変遷を研究する。とくに、清朝末期から現代にかけての親族・社会組織と儀礼・祭祀に関心をもっている。

毎年の季節ごとに催される年中行事や、人生の節目におこなわれるさまざまな儀礼についても同様のことが言える。ちょうど四月は祖先祭祀をおこなう清明節の時期にあたり、みな親族どうしで集まって、供えものと線香や爆竹などの祭祀用品を大量にたずさえ、ほぼ半日かけて祖先の墓に参る。政府は土地が無駄に使われているとして数年前に墓を一斉に取り壊したが、土の下が無事ならばそれでよいと、以前と変わらず祖先を祭祀している人も少なくない。そもそも葬送儀礼自体についても、迷信的な要素を廃し近代国家にふさわしいかたちを普及させようという政府の方針によって、土葬が禁止されて火葬が徹底されたが、そのほかの部分にはほとんど変わっていない。公式的には禁止されているにもかかわらず、人びとの多くは道教の道士を呼んで経をあげてもらい、火葬済みの骨を風水師が選定した場所に埋



↑川魚を炒めたもの(左上)や、さっと熱湯にくぐらせただけのエビ(右上)など、広東の家庭では調理法がシンプルで、味付けもあっさりとした料理が一般的
←新鮮な野菜が売られる市場前の通り



一族の祖先墓に参る人びと



家屋内に設けられた祭壇

れてしまつて個々の人の営みをいかにしてくみとつてゆくべきなのか。フィールドでは常にそんなことを考えながら逡巡する日々である。